

進んで運動に取り組む児童を育てる体育科学習の研究

～ 投・捕の能力の向上を念頭に置いた
ボールゲーム・ボール運動における指導 ～

1 主題設定の理由

(1) 体育科学習の今日的課題から

平成25年度児童の体力向上指導者養成研修」の中で、教科調査官石川泰成氏は、現在の体育科学習の課題を以下のように報告している。

資料1；体育科学習の今日的課題（国立教育研究所発信）

- 運動する児童とそうでない児童の二極化が見られる。
- 児童の体力の低下傾向が依然深刻な問題となっている。
- 体力向上及び運動に対する意欲や思考力の育成等、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られる。

このような課題を解決するためにも、体育科学習をとおして、運動に対する関心を高め、児童を運動好きにすることが求められている。

右の資料2は、文部科学省が「運動への関心」と「体力」の関連性について示したグラフである。文部科学省は、このグラフを基に「運動好きな児童ほど体力が高い傾向にある」ことを報告している。実際、全国の研修会等で、このグラフを提示し、「児童を運動好きにすること」の重要性を発信している。

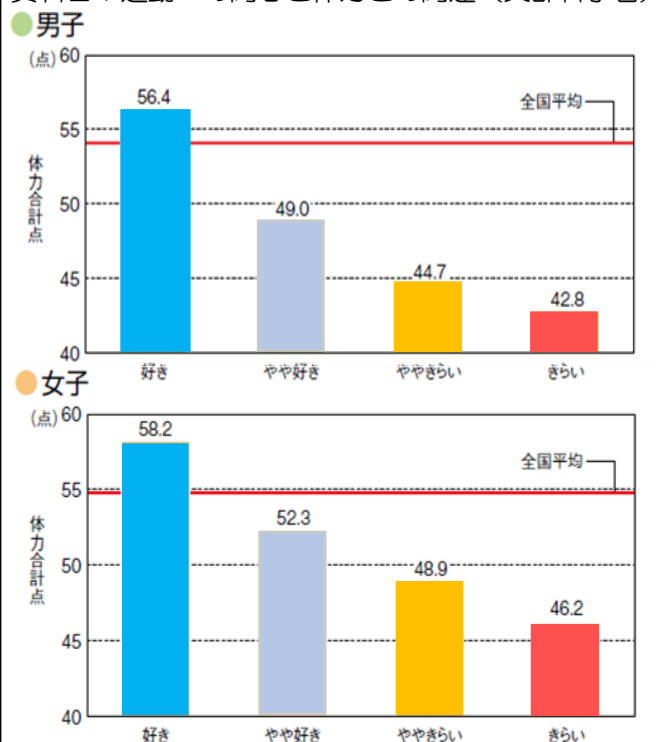
体力を向上させるには、「今までよりも運動が楽しくなった（好きになった）。」「休み時間もこの運動で遊んでみよう。」といったように、児童の運動（遊び）へのかかわり方を改善することの重要性が示されたのである。

このような体育科教育の動向を踏まえ、児童の運動（遊び）へのかかわり方を改善し、「進んで運動に取り組む児童を育てること」は、とても意義深いと考える。

(2) 本校の児童の実態から

本校の児童や保護者の学力に対する関心は非常に高い。その反面、体力に対する関心はそれほどでもない。このような実態を踏まえ、本校は平成18年度から、体育科を学校研究の教科に据

資料2；運動への関心と体力との関連（文部科学省）



え、器械運動系（平成18～20年度）、体づくり運動系（平成21～23年度）、陸上運動系（平成24～26年度）の研究を進めてきた。その結果、「走る」「跳ぶ」「転がる」などの基本的な動きの向上が見られてきており、新体力テストの数値にもその成果が見られる。しかし、昨年度までの研究を踏まえ、以下のような課題が残った。

資料3；体育科学習における本校の課題（平成26年度末段階）

- 日頃から運動（遊び）に取り組む児童とそうでない児童との二極化において意欲、技能、経験の2極化が見られ、特にボールを使った運動（遊び）においては、その差が顕著である。また、男女のボール操作の経験や技能に明らかな差が見られ、男子に優位性が見られる。
- 平成18年度からの体育科学習の研究をとおして、各種の運動の技能・体力の向上は見られるものの、新体力テストでは、投の能力（ソフトボール投げ）が全国平均より低い。

このような児童の実態からも、ボールを投げたり、捕ったりする技能を伴う「ゲーム」「ボール運動」の領域において「進んで運動に取り組む児童」を目指し、体育科学習の充実を図ることは、とても意義深いと考えた。

(3) 今までの研究成果から

本校研究を進めていく上で、「課題解決を生み出す学習展開の工夫（教師と児童の）」「予備的な運動の工夫（児童の行為）」「個に応じた即時評価の工夫（教師の行動）」の3つの着眼を大切にしてきた。この9年間の研究をとおして、この3つの着眼に研究の幅を絞ることによって、シンプルかつ一般化できる有効な学習指導過程が明確になってきた（資料4参照）。

資料4；本校の研究の着眼の有効性（平成26年度末段階）

「着眼1；課題を生み出す学習展開の工夫」

目指す児童の動き（ゴール地点）を設定した上で、その動きの習得に向けて児童の課題意識が喚起したり持続したりするように、効果的な刺激（新たな場や動きの提示）を段階的に与えることは、児童の主體的な学びにつながり、そして、運度へのかかわり方の改善につながっている。

「着眼2；予備的な運動の工夫」

「サーキット学習」（毎時間行う予備的な運動）と「たかみんタイム」（全校体育の取組）とを関連させて行っていくことは、児童の技能・体力の向上につながっている。このことは、児童一人一人の「できる喜び」につながり、そして、運度へのかかわり方の改善につながっている。

「個に応じた即時評価」

個に応じた即時評価を具体的に設定することは、個々の動きの見取りをより具体的に行うことにもつながり、児童の技能・体力の向上につながっている。このことは、児童一人一人の「できる喜び」につながり、そして、運度へのかかわり方の改善につながっている。

そこで、本年度も、過去の研究を踏襲し、これらの着眼を用いて、「ゲーム」「ボール運動」の研究を進めていくことにした。

年 次	研 究 の 概 要
1年次(平成27年度)	○ ゴール型・ベースボール型の運動をとおして、「投げる」「捕る」能力の育成を図る実践を重ね、系統（カリキュラム）を作る。
2年次(平成28年度)	○ ネット型の運動をとおして、「打つ」「受ける」能力の育成を図る実践を重ね、系統（カリキュラム）を作る。
3年次(平成29年度)	○ ゴール型・ベースボール型の運動をとおして、「蹴る」「止める」能力の育成を図る実践を重ね、系統（カリキュラム）を作る。

2 目指す児童像と研究の仮説

本研究の目的は「進んで運動に取り組む児童の育成」である。その方向性を全職員が共通理解した上で、研究が進んでいくよう、目指す児童の姿を以下のように設定した上で仮説を立てる。

【目指す児童の姿；進んで運動に取り組む児童】

- 自分の変容や伸びが分かり、新しい自分や体力の向上を求め続けて取り組む児童。
- 友達とかかわりながら運動し、新しい動きを考えたり工夫したりする児童。

【研究の仮説】

「ゲーム」と「ボール運動」の学習において、児童が主体的に課題を見付けたり解決したりできるように学習展開を工夫する。その上で、主運動に関連する予備的な運動を行う場を設定するとともに、個に応じた即時評価を行う。

そうすれば、児童たちは、運動へのかかわり方を改善し、進んで運動に取り組むようになるとともに、ボールを投げたり捕ったりする技能を向上させていくであろう。

3 仮説実証のための具体的な着眼

【着眼1】 課題解決を生み出す学習展開

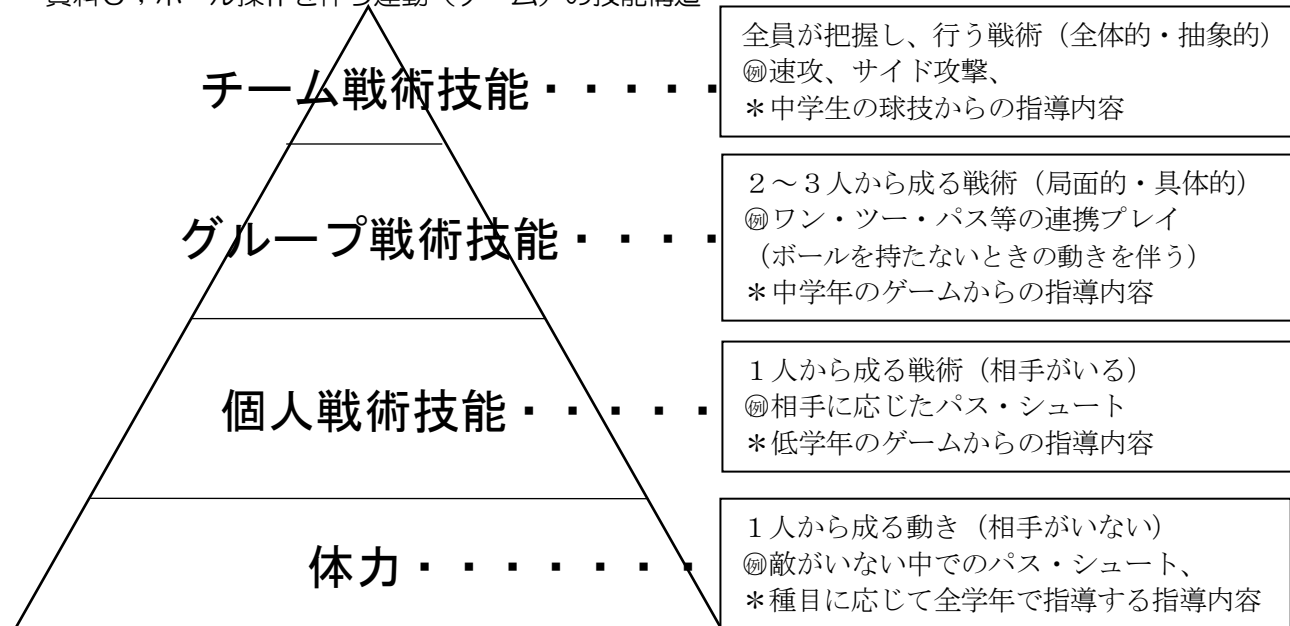
以下の手順で、主体的な児童の課題解決学習が展開するようにする。

① 学習内容（目指す動き）の吟味

学習指導要領に加え、過去の文献（『『ボール運動の指導プログラム』、リンダ・L・グリフィン 著、高橋健夫 監修、1999年、大修館書店』・『『体育科の学年別技術と学習指導過程』、信州大学附属松本小学校学習指導研究会 発行、1968年、明治図書出版』）を基に、ボール操作を伴う運動（ゲーム）の技能構造を、以下の資料5のように整理し、捉えることとした。

この技能構造を念頭に置き、学習内容（目指す動き）を吟味する。

資料5；ボール操作を伴う運動（ゲーム）の技能構造



【低・中・高学年の各段階で習得を目指す「投・補の技能」】

低学年…体全体を使った多様な投・捕の経験

中学年…体幹と腕を正しく使った投・捕の技能

高学年…ボールの弾道を意識した体幹・腕に加え手首を使った投・補の技能

② はじめの規則・ルールの設定と単元の展開

①を踏まえ、コート大きさや取り扱うボールなどをはじめとする「規則の設定（低・中）・ルールの簡易化（高）」を設定する。その際、規則の工夫により、動きの広がりや高まりが発生するように、単元の展開を工夫する。以下に示すように、規則・ルールの工夫が、段階的な技能向上につながるようにする。また、低・中学年期は規則の工夫の時間を多く設定し、規則が変わることによって楽しさが変わるというゲームづくりを重視した展開で、高学年は、ある程度ルール工夫を行った後、作戦づくりを重視した展開で、学習を進めるようにする。（資料6参照）

資料6；学習展開を工夫する上での留意事項

【規則の工夫がもたらす投・捕の技能の向上のイメージ】

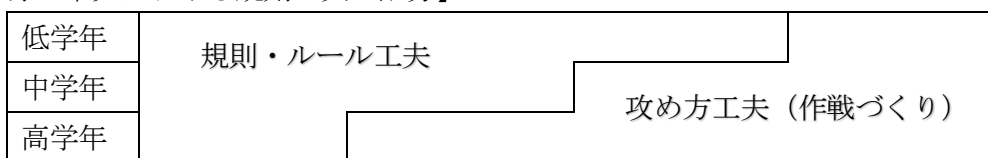
「はじめの規則（ルール）」…基本的な動きの発現

→ 「規則（ルール）の工夫①」…よい動きの発現

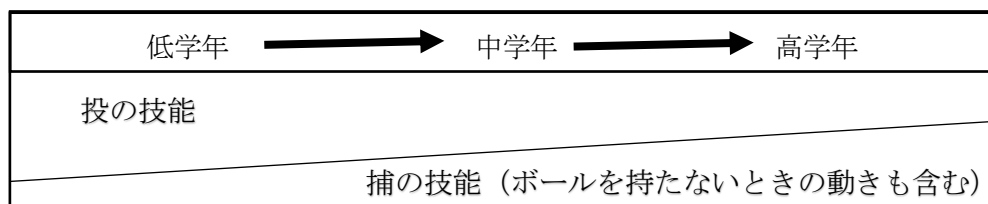
→ 「規則（ルール）の工夫②」…よりよい動きや多様な動きの発現

→ 「規則（ルール）の固定」…「攻め方工夫」による、よりよい動きの発現

【学年毎の単元における規則工夫の配分】



【発達の段階に応じて学習内容として取り扱う投・捕の技能の割合】



③ 課題解決のための手立ての設定

○ 動きのイメージの共有を図るネーミング活動

よい動きについては、全体でその動きのイメージを共有する場を設けるとともに、その動きを行うことを奨励するために動きの「ネーミング（キーワード化）」を行う。

○ 学び合いの工夫

他の人と動きを見合ったり（主に低学年）、伝え合ったり（主に中学年）、教え合ったり（主に高学年）する活動が展開し、課題解決が促されるように、「兄弟グループによるチーム編成」、「チーム内ローテーション」、「審判方法」などの学び合いの仕方について提示する。

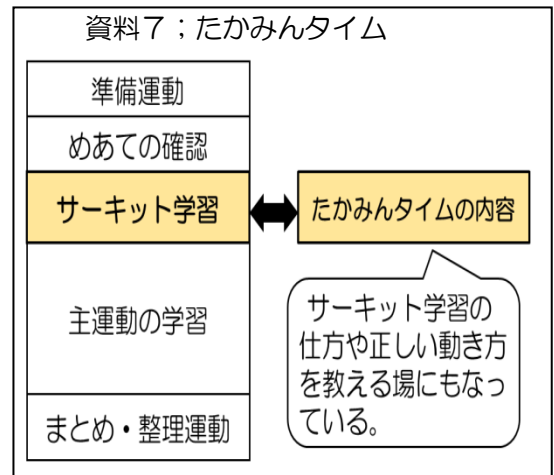
【着眼2】 予備的な運動の工夫

(1) サーキット学習

その単元の主たる動きを分析し、基礎・基本となる動きの定着を図る予備的な運動を行う場を設定する。その単元の「目指す児童の動き」を基に、必ず全員に体験させたい動きを分析し、その動きの練習をする場を用意する。

(2) たかみんタイム

全校体育の取組として、火・木曜日の朝の10分間、運動に取り組む活動を設定する。運動の内容として、体育科学習で行っているサーキット学習と同じ運動（資料7参照）を設定する。



【着眼3】 個に応じた即時評価

単元や本時での到達目標を明確にし、目指す児童の具体的な姿（評価規準）「A（特に優れている）」、「B（おおむね達成している）」、「C（達成していない）」を明らかにした上で、課題解決ができていないC評価の児童を即時に評価する教師行動のあり方について究明する。